

第106号 通巻19巻第3号 1999年9月 6日 発行

守山市立埋蔵文化財センター 電話・FAX 077-585-4397

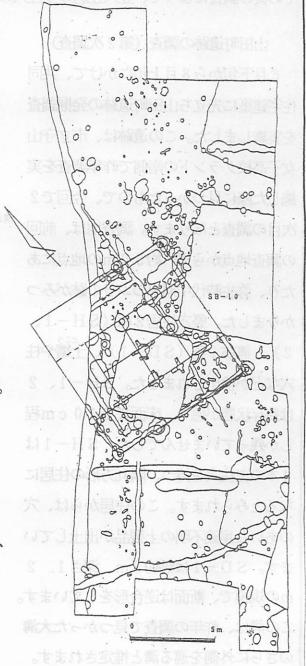
楼閣状建物の再調査 伊勢遺跡 5 8 次調査

伊勢遺跡で昨年暮れ、確認された楼閣とみられる建物の全体を確認するため、8月初めから阿村町地先

において重要遺跡確認調査を実施していました。今回の調査では、伊勢遺跡の中心部にあたる方形区画の2重の棚の延長部分の確認と、正方形プランのSB-10のすべての柱穴の確認ができるものと期待していました。しかし、51次調査において検出された、中世の栗次部条望に沿った大溝が予想以上に大きく、大型建物の北西隅の柱穴部分が大溝によって切られていることが判明しました。大溝は幅約15mもあり方形区画の東側部分を切っていて、棚の延長部分についても確認することができませんでした。

今回の調査によって、3間×3間(9m×9m)の建物の 未検出であった柱穴の一部が検出され、内側の柱穴配置が確 定しました。その結果、予想どおり内側の柱穴配置は、2間 ×2間(4m×4.5m)の総柱式で、外側の柱穴とは東西 方向は対応し、南北方向は対応しないことが確認されました。 さらに、北辺中央の溝の幅が約70cmと広く、布掘状となっていることから、北側中央に入り口部分が想定されます。

内・外側の柱穴はともに、深く大きな柱が据えられていたと考えられ、SB-10は高い複層構造の建物と推定したわけです。建物の各辺が、正確に東西南北を向いていることや、独立棟持柱付き大型建物が検出されている伊勢遺跡東半部のほぼ中心に位置することから、ランドマークとなるような重要な建物であったと考えられます。方形区画の大型建物群とともに伊勢遺跡の中心部を構成していたとみられ、今後その周辺部で確認調査を実施する予定です。(伴野)



▲ 伊勢遺跡調査平面図

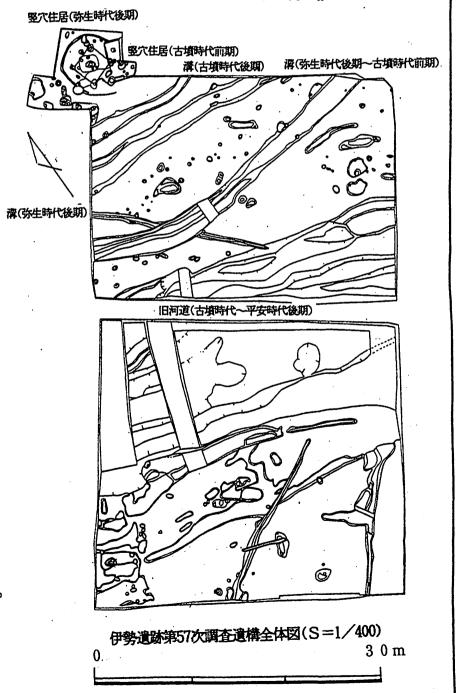
伊勢遺跡の調査 (第57次調査)

阿村町字上番田143-1番地他で工場建設に先立ち、約2,000 ㎡を対象に発掘調査を実施しました。その結果、調査地中央から古墳時代~平安時代後期にかけての旧河道が検出されました。旧河道の北側は、一部に砂礫層が露出していて、伊勢遺跡のなかでも最も高所にあたります。ここからは、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居や溝、古墳時代後期の溝などが検出されました。また、旧河道から南側にかけては緩やかに傾斜していて、平安時代後期~中世にかけての溝がみつかっただけで、遺構は全体に希薄でした。これらのことから、弥生時代後期における伊勢遺跡の居住域の南端は、今回検出した旧河道の北側であったと考えられます。なお、7月に開催した現地説明会で、弥生時代後期の柱穴列と考えられた遺構は、その後の調査によって、竪穴住居の主柱穴の一部であったことが確認されました。(小島)

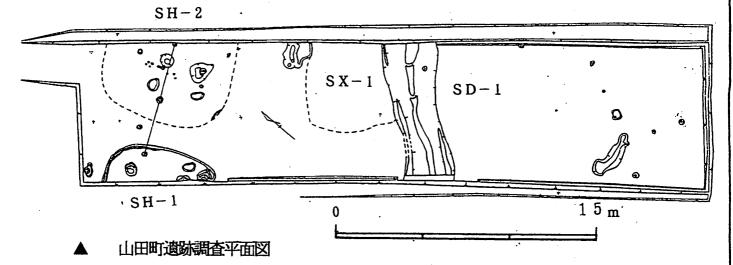
山田町遺跡の調査(第2次調査)

6月下旬から8月上旬にかけて、共同 住宅建築に先立ち山田町遺跡の発掘調査 を実施しました。この遺跡は、市立守山 女子高校グランドの南側で昨年調査を実 施した際に見つかったもので、今回で2 次日の調査となります。調査地は、前回 の調査地点から東へ約50mの地点にあ たり、弥牛時代中期末のムラの跡がみつ かりました。竪穴住居2棟(SH-1、 2)、溝跡1条(SD-1)、土壙や柱 穴などが検出されました。SH-1、2 は残存状態が悪く、床面まで10cm程 しか残っていませんでした。 SH-1は 4本の主柱穴を持つ、隅丸方形の住居に なるとみられます。この住居からは、穴 のあいた用途不明の土製品が出土してい ます。SD-1は幅約3m、深さ1. 2 mの規模で、断面は逆台形をしています。 この溝は、昨年の調査で見つかった大溝 のさらに外側を巡る溝と推定されます。

今回の調査地はムラの東端にあたるよ

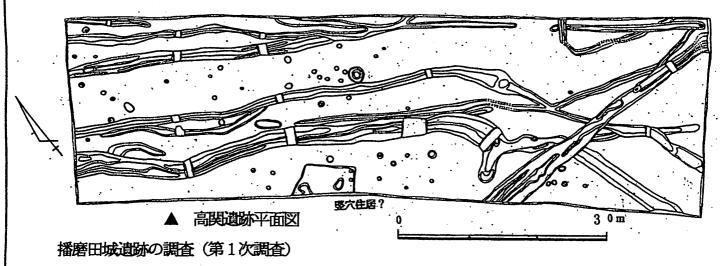


うで、遺構は希薄となっています。しかし、SD-1の外側にも同時代頃の土壙がみつかっていて、まだ 東側にムラが広がっていることが予想されます。 (藤原)



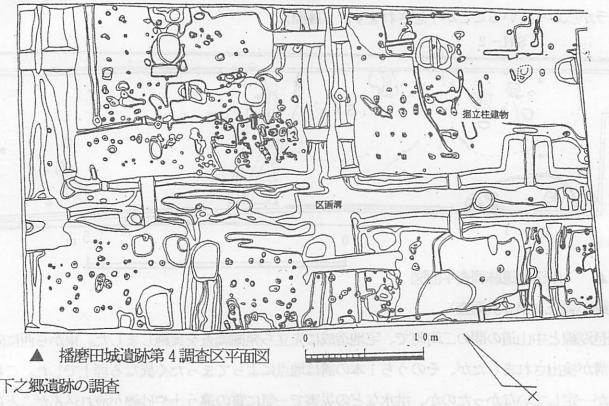
高関遺跡の調査(第3次調査)

J R琵琶湖線と中山道の間の二町町で、宅地造成に先立ち発掘調査を実施しました。東から西に向かって流れる溝が検出されましたが、そのうち1本の溝は地点によってまったく異なる埋土でした。これは、水の流れが一定していなかったのか、洪水などの災害で一気に質の違う土や砂礫が流れ込んだことによるものとみられます。これらの溝からは、6世紀代の須恵器や土師器の甕などが出土しています。また、一辺が4mほどの方形プランの遺構が検出されています。主柱穴等は検出されませんでしたが、竪穴住居の可能性があります。遺物は少なく時期は不明ですが、昨年調査された隣接地において、弥生時代後期の竪穴住居が2棟検出されていることから、それと同時代の住居ではないかと思われます。(大岡)



現在、4つ目の調査区の発掘調査を完了しています。4つ目の調査区では、コの字状の溝で4区画に区分されていて、それぞれの内側からは溝に並行して掘立柱建物跡が検出されました。建物の規模は3間×3間(5m×5m)、3間×4間(5m×6.5m)ほどと推定されます。井戸も4基検出していて、枠の井筒に監修を2段から3段に組んでいます。この調査区の東隅には、黒色の粘土が堆積した落ち込みが

出土した土器から弥生時代後期頃に埋まったものと推定されます。 (畑本)



下之郷遺跡は、文化庁・滋賀県教育委員会の指導を得ながら、8月初旬から確認調査を進めています。この調査は、開発に伴う事前の発掘調査と異なり、重要な遺跡の範囲を確認するために実施しているものです。環濠集落の東端と推定される水田地(休耕田)で、土地所有者の協力を得て遺構検出を行っています。現在までの調査で、遺跡の最も内側にあたる環濠とその外側の環濠が検出されていて、当初想定して

